

『労働戦線』の創刊と編集事情(2)

松尾洋・佐藤茂久次氏に聞く

はじめに

- 1 産別会議への就職
- 2 『労働戦線』の創刊（以上、第493号）
- 3 編集・経営事情（本号）
- 4 後退期の『労働戦線』

3 編集・経営事情

用紙の割り当て

『労働戦線』に対する用紙の割り当て量はどれほどでしたか。

松尾 産別会議では1946年8月、政府の用紙割当委員会に対して20日付の『労働戦線』の創刊号を「試刷」として添付して正式に申請しました。1946年10月29日付『労働戦線』第4号の「本紙定期刊」の記事によれば、産別会議は週刊で50万部発行の申請を行ったようです。そして、10月25日に10万部の配給が決まりました。この結果、『労働戦線』は週刊での定期刊行が可能となったのです。

私の記憶では用紙の割り当て量は四半期ごとに異なり、一定でなかったと思います。割り当てを受けその証明書をもって洋紙店に行っても、製品が入荷していないということで実際に購入することができなかったこともありました。当時、原材料の不足や電力不足などで洋紙生産がストップし、いわゆる“紙飢饉”と呼ば

れるような状態もあったのです。けれども『労働戦線』に対する用紙の割り当て量は、総同盟の『労働』よりも多かったことは確かです。

『労働』の場合も、10万部の割り当てだったようです。

松尾 そうでしたかね。『労働』は『労働戦線』の半分サイズ、タブロイド判の4頁建てでした。

とにかく当初は労働組合の機関紙の場合、日本を民主化しよう、軍国主義復活の歯止めにしよという占領軍の労働組合に対する育成方針もあって、用紙の割り当てにおいては優遇されておりまして。だから産別会議であれ総同盟であれ、労働組合の機関紙の場合はたいいてい認められていました。

当時、紙は貴重品で、公定価格で安く購入した用紙を闇に流すこともあったらしいですね。

松尾 産別会議はそんなことはしていないですよ。ただし割り当てられた用紙を全部『労働戦線』の印刷に回したかと言えばそうではなく、文化部や婦人対策部の出版物やピラ、チラシな

どの印刷に流用したことがありました。また用紙の割り当てを受けられなかった、産別会議の単産や単組の機関紙の印刷に回したりしたこともあったと思います。

このことについても紹介しておきます。産別会議では機関紙については用紙の割り当てが認められたけれども、単産の機関紙や事務用紙には割り当てられなかったのです。機関紙への割り当てが決まる前だと記憶していますが、私と斎藤一郎が商工省の用紙課に事務用の用紙を配給するよう交渉に行きました。当時の用紙課長は佐橋滋です。佐橋は商工省の労働組合の初代の組合長で、のちに通産省の事務次官になっていますね。斎藤一郎は激しい性格です。彼は佐橋の机を叩いて、「用紙を出せ」と怒鳴りまくっていました(笑)。

私らは議会にも出かけて陳情しました。社会党議員の控室に出向いたさい、代議士になったばかりの岡田春夫が出て来ましたが、斎藤君はその岡田春夫に対しても怒鳴りつけたのです。こうした激しい交渉で、私らは商工省から使い切れないほどのたくさんの用紙の配給を受け、これを傘下の単産に分けたのです。このとき「交渉はこうしてやれ」といろいろ指南してくれたのが、政治評論誌『人民』や暴露雑誌『真相』を発行していた人民社の社長の佐和慶太郎です。

伊藤律は戦後すぐの時期、人民社の編集部員だったそうですね。

松尾 いや、私は知らない。佐和は戦前、日本でも反ファシズム・人民戦線運動の潮流をつくろうと発行していた『労働雑誌』の編集部員だった人で、戦後初期の左翼出版界においても重要な存在となっています。

羽仁五郎と長島又男の尽力

松尾 この機会にぜひ紹介しておきたいこと

があります。『労働戦線』は1946年10月に、早期のうちに申請が認められ、この年の10月第4週から週刊での定期発行となりました。本来なら認可はもっと遅れ、割り当て量も削られたに違いない。私らにはそういう不安がありましたから、申請を審査する当日には単産の教宣部員や文化部員などの応援を得て、商工省にデモを組んで圧力をかけました。

用紙割当委員会は商工省の管轄にあり、新聞業界と出版業界の代表、そして学識経験者など中立の委員で構成されていました。委員会は同時に、業界の利害がぶつかる場となっていました。絶対量が決まっていて、これをどう配分するのか、用紙の確保が経営に直結していた当時、その分捕り合戦には激しいものがありました。中立系の委員といっても業界と繋がっている委員もありました。産別会議の申請が早期に認められたのには、羽仁さんや長島又男さんの尽力があったからなんです。

羽仁さんとは歴史学者の羽仁五郎さんのことですね。

松尾 そうです。羽仁さんは、学識者を代表する中立側の委員でした。彼は進歩派の歴史学者として戦前から有名で、当時は在野の知識人を代表する存在だったのです。戦争が終わって価値の尺度が180度変わってしまい、デモクラシーや日本の平和・文化国家の建設が叫ばれるなかで、彼の発言は重かったのです。羽仁さんは労働組合や文化団体の機関紙発行について、商工省の佐橋滋に対してはもちろん、GHQの民間情報教育部に対してもその重要な意義を唱えて、優先的に用紙を割り当てるよう直言していたのです。

羽仁さんが、労働組合の宣伝活動や中央地方における文化活動を重視して、用紙割当委員会の委員としての立場から応援していた事実はこれまでほとんど知られていない。羽仁さんは1947

年4月の第1回参議院選挙に無所属で立候補され、当選します。それまでの彼の活動は、政府の用紙割当委員会が主な舞台でした。『労働戦線』が用紙の割り当てを受け、発行できたのは彼の尽力があったからだと思いますね。

羽仁さんとの関連でこの点も述べておきます。総同盟は当初、用紙の割り当てを政府に申請していなかったのです。産別会議に対する用紙の割り当てが決まって、委員会では総同盟も結成されているじゃないか、ということでも向こうにも配給されたのです。

さっき『労働』は週刊で10万部という指摘がありました。『労働戦線』と『労働』が同じ割り当て量だったのは、両者を平等に扱おうとする配慮があったのだと思いますよ。しかし組合員の数では私らの産別会議が163万人、総同盟が85万人であり、この数字からいえば『労働』に対する用紙の割り当てにおいてはぜひぶん優遇された結果になっています。

用紙の割り当てにあたってはもう一人、長島又男さんの貢献も大きかったと思います。長島さんも用紙割当委員会の委員でした。彼は、新聞業界を代表しての委員でした。新聞業界を代表しての委員といっても、長島さんの場合は、戦前からつづく既成の大手の新聞社の代表としてではなく、新興紙の代表として選ばれていました。

長島又男氏は当時、『民報』の主筆をなさっておりましたね。

松尾 そうです。長島さんは『民報』(のち『東京民報』と改題)における進歩的なジャーナリストでした。

『民報』は新興紙を代表する存在で、長島さんや栗林一石路(農夫)さんが、現在は国際文化会館の理事長をなさっています松本重治氏を社長にかついで設立した新聞社なんです。松本重治氏は戦時中は近衛文麿の側近の一人で、同

盟通信社の編集局長をされていたと聞いております。長島さんも栗林さんも同盟通信社におられ、それが縁で戦後は『民報』を創刊され、デモクラシーと日本の平和国家再建へ向けて論陣をはっていたのです。

長島さんも用紙割当委員会では、羽仁五郎さんと一緒に労働組合の機関紙に対する優先的割り当てや、『アカハタ』に対する用紙の割り当てに際しても大変尽力されたそうです。長島さんは『東京民報』が廃刊となったのち、機関紙連合通信社の常任理事に就任され、私は長島さんとはこの機関紙連合通信社で一緒になりました。要するに『労働戦線』は羽仁さんや長島さんの尽力もあって、早期のうちに用紙の割り当てを得て機関紙活動を円滑に行うことができたのです。

創刊時のスタッフ

『労働戦線』の編集部員は何人ほどおりましたか。

松尾 準備会の当時は私一人です。私一人で『産別会議準備会ニュース』を編集・発行しておりました。産別会議の結成へ向けて『労働戦線』の創刊号が準備されますが、この創刊号も、第2号も事実上、私が争議中の読売新聞社の記者の協力を得て編集しました。編集だけでなく、さっきも言いましたが紙の手配や印刷の仕事も私が行っていたのです。

先に印刷について言います。創刊号と第2号は当時、有楽町にありました朝日新聞社の印刷工場で刷りました。産別会議の初代の議長が、新聞単一(日本新聞通信労働組合)の委員長の聴濤克巳さんです。聴濤さんは朝日支部から出ていて、論説委員でしたから発言力があり、論説主幹の笠信太郎氏の信任も厚かったらしい。そんなこともあって聴濤さんが直接、印刷局長に頼んで印刷をお願いしたのだと思います。と

ころが、その印刷工場の方で労働者の間に作業量などの問題で不満が起きまして、現状のままでは印刷を引き受けることはできないという事態になりました。

このため『労働戦線』の印刷は、第3号から日本経済新聞社にかわっています。その『日経』の組合も新聞単一に加盟していて、新聞単一では当初、『朝日』以上に組合活動が活発な組合でした。

手順はこういう流れでした。まず、当時の『アカハタ』がやっていたように代々木の「あかつき印刷」で活字を組んでもらうのです。これを道路事情が悪かったので活字が飛ばないように、手伝いの方に押さえてもらいながら、茅場町の日本経済新聞社の印刷工場までリヤカーで運ぶのです。そして『日経』の印刷工場で紙型をとって鉛版をつくり、これを輪転機にかけて印刷していたのです。この作業も最初のうちは私が行っていました。

さて、『労働戦線』に対する用紙配給の見通しが立ち、週刊での定期発行が企画されましたが、私一人で編集をやり切れるものではない。私自身、聴濤さんをお願いしたこともあって、間もなく小池賢三君が編集部員として入って来ました。小池君は、戦前はプロリタリア科学同盟の組織部員だった人です。彼は編集の経験が無かったのですが、新聞単一の記者連中に指導を受けて早いうちに覚えました。彼は努力の人でもあったのです。

さらに1946年の10月か11月初め、『読売新聞』のベテラン記者だった小俣行夫君が入り、編集部はいっきょに戦力アップしました。私は新聞製作や編集では素人です。小俣君は読売の第2次争議で解雇された、もとは整理部かなんかに属していた新聞製作のプロです。彼が入ったことで記事整理もうまくゆき、『労働戦線』も一味ちがった編集が試みられ、親しみのある機関

紙となったのです。

この結果、私は編集発行の名義人となりましたけれども、紙面編成など面倒な部門を離れて経営に専念することができたのです。私は原稿も書き、取材もしましたけれども、主には経営部門を受け持ち、小俣行夫君が事実上の編集長となって『労働戦線』の編集を行っていたのです。

佐藤茂久次さんが編集局に入られたのは1947年に入ってからとお聞きしていますが、正式にはいつですか。

佐藤 私は1947年の7月、いわゆる自己批判大会のすぐあとに編集部員となりました。私が入ったとき、産別会議の本部は有楽町の関東配電の焼けビル内にありました。のちに本部は新橋の愛宕警察署の前の、産別会館に移りましたが、私が小俣行夫君に会ったのはその産別会館であったような気がします。

松尾 実は小俣行夫君は1946年の10月か11月初めに編集長格で入ってきて、47年の2・1スト前後にいったん辞めた経緯があるのです。名前は忘れたけれども、東京の新興地方紙とでもいうのか、小さな日刊の新興紙が創刊され、小俣君はその新聞社の編集局長として招かれたのでした。しかしどういう事情だったのか、彼は数か月ぐらいいしてまた『労働戦線』に戻って来たのです。

佐藤さんが編集部員として入られたことについて、私ははっきりと記憶しています。1947年の梅雨のころ斎藤一郎が編集部にやって来て、私に「いい記者がいるから紹介しよう」と言ったのです。こちらとしても『労働戦線』を発展させたいと思っておりました。佐藤さんがもと『中国民報』(現『山陽新聞』)の記者だったということはそのとき斎藤君から聞いて知ったのです。こちらとしてもプロの記者を欲しかったので、願ってもないことでした。

『労働戦線』の編集は、松尾 - 小俣 - 佐藤ラインで行われていたのですね。

松尾 まあ、1948年前半期ぐらいまではそうです。私は1948年8月をもって辞めて、機関紙連合通信社に移り、労働記者となりました。またこの時期までが『労働戦線』の高揚期で、これ以降は販売部数も落ち、紙面編成でも変化が見られます。佐藤さんが健康を回復され、復職されたときは『労働戦線』は後退期に入っていたのです。

佐藤 そういことです。

有能な書記連中

松尾 『労働戦線』の発行は、松尾 - 小俣 - 佐藤のラインが軸になっていたけれども、機関紙・誌部門の書記や補助員の手伝いも得て行われていたのです。

『労働戦線』を編集面で見た場合、一つの特徴は解説記事であれ、報道記事であれ、事務局の書記の全面的な協力を得て編集されていたことです。機関紙というのは、またそういうものだと思いますね。

いま顧みても産別会議の書記はみな有能で、実力がありました。私は、テーマによっては「主張」欄や解説記事も書くことにしておりました。けれども編集総務の仕事で多忙を極め、取材もあり、さらに私の場合は経営の責任者だったので、記事を書きたくてもできる状況にはなかったのです。集まった原稿量を計算して、一応の段組をします。オーバーした場合はいくつかの記事を次号に回せば済みますが、問題は不足した場合です。そのときは各部の書記に明日までとか、今日中にとか無理を承知で頼みました。そして彼らは実際に約束を果たしてくれました。

書記のなかでは原稿は主にどなたに頼まれたのですか。

松尾 ある程度はテーマは決まっていたけれども、全員の書記に書いてもらったと思いますよ。私が在職中、国際関係の記事はたいてい井出洋さんに頼んでおりました。斎藤一郎は労働組合であれ、日農の運動であれ何でもこなしましたね。脱帽するほどの“粘着”のタイプで、理論分析のレベルも高く、記事原稿には定評がありました。彼は、机に本や資料をうず高く積み、ぶつぶつ言いながら、貪欲に本を読んでおりました。斎藤は東北の出身で、歌人の斎藤茂吉の甥とか義兄弟と言われていました。彼ほど精力的で、すさまじいエネルギーをもっていた労働運動のオルガナイザーはいないんじゃないかと思います。

佐藤 斎藤一郎は中学のときから山形県の庄内地方か、村山地方だったかもしれないけれども、小作争議の指導をしていたそうですよ。私は、斎藤とは急死するまで付き合いませんでした。

松尾 書記はそれぞれ得意な専門分野をもっていました。だから企画さえ立てれば、これは誰に頼むとか、この問題の解説記事は誰にしようということがすぐに頭に浮かび、原稿集めで苦勞することはなかったのです。編集のさいの苦勞と言えば、むしろ日本共産党との関係でえらく神経を使いました。

井出洋さんは大河内一男先生の門下でも傑出した俊英で、みんなから慕われてファンが多かったそうですね。大原社研のもとで研究員で、現在は法政大学教授となっている田沼肇さんも井出さんのファンだったそうですよ。

佐藤 井出さんは、日本経済の背骨をなす旧財閥家の娘さんと結婚されたとのことでした。彼はそういう環境のなかで生活していたけれども、芯がしっかりしておりましたね。私が在職中、彼は世界労連の書記局に移り、何年かして

戻って来ました。朝鮮戦争下の弾圧に50年問題もあって、苦勞されたのでしょね、戻って来たときには彼は痩せてひよろひよろになっていました。

井出洋さんは、根は私らと同じブチブルだと思いますよ。しかし、よりよい日本社会を築くために労働者の連帯と労働運動を支えようと、まともに頑張っておりました。彼は純粹培養されたような清さがあり、謙虚で、まあ理想を追うタイプでした。だから例えば企業経営を任された場合、成功していたかは疑問です。けれども学問の道を選択して東大に残っていたなら、革新の陣営に立つ高名な社会政策学者になったと思います。とにかく頭脳明晰でした。

書記として、ほかにどのような方がおりましたか。

松尾 細谷松太を除いて、まずは三戸信人をあげなければならぬでしょうね。彼について現在でも得体の知れない男という人がいます。実際に押しが強く、迫力があり、またアレも切れていましたね。ほかに大谷徹太郎、萩澤清彦、海野幸隆、小林英雄、酒谷忠海、秋山武、横山不二夫、芝寛、入江節次郎、坂寄俊雄、天達忠雄らがおりました。正規の書記だけでも30人から40人、もっと在籍していたかもしれない。いまでいうアルバイトを含めると、大所帯でした。一時期は人数が多く、二人で一つの机を使っていましたよ。

現在、日本学術会議の会員として活躍されている岡倉古志郎さんも、ごく早いうちは産別会議の書記だっと思います。彼は1年ぐらいいて、自ら設立した世界経済研究所の研究员になり、アジアの民族解放運動を研究したいと言って辞めました。実際にその後はアジア・アフリカ研究所の所長や、大阪だったか東京だったか、外国語大学の教授に就任され、国際政治の講義をなさっていたらしい。

現在は大東文化大学で教鞭をとられています。

松尾 とにかく産別会議の書記は学歴が高く、実際に学識があり、また一家言のある人ばかりでしたね。

産別会議は結成時、事務部門として組織部、調査部、情報宣伝部、婦人対策部、機関紙部など10の部局がありました。『労働戦線』の編集部は、正式には「労働戦線編集局」と名乗り、機関紙部の管轄となっていました。のちに事業部なども設置されていますが、書記の方々はいずれかの部門に配置されていたのですね。

松尾 そうです。事務一般ではなく、専門書記となっていました。産別会議の庶務資料に、書記などの人事異動の記録は残っているのかしら…。あの時分は大雑把で、書記の異動も激しかったから残っていないかもしれない。

井出洋さんや、新産別に行った三戸信人、大谷徹太郎、のち中央労働委員会に移った萩澤清彦、いま労調協(労働組合調査協議会)にいる海野幸隆、それに小林英雄らが組織部に属していたと思います。また酒谷忠海が文化部、これも新産別に行った秋山武が情報宣伝部です。秋山は書記としては四、五番目ぐらいに古く、準備会の段階から務めていて、スポークスマンのような存在でした。彼は旧制松本高等学校のときに学生運動をやって退学をくったらしい。彼も優秀でしたね。

横山不二夫も、調査部だったのではないのかな。彼は2年ぐらいして、産別会議の推薦で東京都労働委員会の調査課長に転身し、労働側の立場に立って私らの運動を援護してくれました。のちに法政大学教授となった吉田秀夫さんは保健部です。この保健部にも、のちに産業・労働行政や、産業医学の歴史に残る調査や報告書を作成した書記がいたのですけれども、何分

時が経って忘れてしまいました。ほかに清水一行や橋本つねよしも正式な書記だったと思います。

清水一行さんとは、企業の社会性をテーマとした、経済小説家とか企業小説家とかいわれるあの小説家ですか。

佐藤 そうです。いまは売れっ子の小説家です。彼は早稲田大学の法学部の出身で、弁護士となって活躍したかったらしい。在学中、何かの運動に関係して中退されたとのことでした。

僕はその昔、清水一行の小説『兜町(しま)』(1966年)を読み、日本経済の腐敗性、人間の浅ましさを知って衝撃を受けたことがありました。

佐藤 彼の作品は“社会派小説”というのかな、日本で初めて企業犯罪を暴く小説を文学の領域で確立したのではないのでしょうか。私も文学が好きで、松尾さんも学生時代は文学青年だったらしいが、とにかく産別会議の書記は文才がありました。頭が整理されているのでしょね、原稿を頼めば、極端に言えば1時間も少ないうちに400字詰原稿用紙5、6枚のマスを埋めるのです。

話は変わりますが、調査部には天達忠雄や、のちに立命館大学の教授となった坂寄俊雄、また蔵野精三らがおりましたね。天達が調査部の主任で、そのすぐ下の書記が坂寄でした。二人は組んでおりました。天達については、“学究派のボス”というような印象が私にはあるのです。入江節次郎さんも調査部じゃなかったのかな。

調査部の部長は中原淳吉です。中原は東芝労連の出身で、電工(全日本電気工業労働組合)を代表して産別会議の幹事となっていました。中原は戦時中に京都帝大の経済を出たインテリで、私らより年齢は一回り下ということもあったのか、何か遠慮がちで、力強くリーダーシップを発揮するというタイプではなかったです

ね。

斎藤一郎と三戸信人

佐藤 ところで、私の記憶では斎藤一郎の所属はやはり組織部だったと思います。斎藤は戦時中に海野幸隆と何かの運動で関係があり、治安維持法違反で検挙・投獄され、服役した宮城刑務所でも一緒だったらしい。そういう関係もあってだと思いますが、二人は大変仲が良かったようです。私は斎藤一郎を介して書記となりました。彼には独裁的なところがあり、陰では“斎藤天皇”と呼ばれていましたね。でも何か陰があり、感情の起伏が激しい、という印象があります。

松尾 余談ですが私は一時、斎藤一郎に共鳴しておりました。1947年7月10日、産別会議は臨時大会、いわゆる「自己批判大会」を開いて新しい運動方針を採択しますが、それまでは内部対立が激しかったのです。斎藤や三戸信人、大谷徹太郎らが当時、「共産党は産別会議を私物化している。実にけしからん」と、口角沫を飛ばして日本共産党を非難していました。

私も、産別会議との関係のあり方について実際にまずい点がありましたから、当初は彼らに同調していたのです。そして、臨時大会で産別会議の新運動方針案が決まり、いわゆる自己批判問題に対する大会決定が正式に決まると、私は組織にいる者として当然これを支持しました。斎藤一郎も「これが組織というものだ。決まった以上私は支持する」として賛成したのです。

1947年11月17日、産別会議は第3回大会を開催し、地域闘争や産業復興運動の展開を盛り込んだ運動方針を決めました。このあたりから民間問題が顕在化するのです。私はこの運動方針にも賛成しています。ところが斎藤一郎が「こんなセクト的な運動は通用しない」として憤慨

し、意見が分かれました。民同問題と『労働戦線』の編集については、あとでやや詳しく述べたいと思います。

佐藤 確かに産別会議の書記はみんな有能で、かなり力量がありましたね。産別会議の事務局のメンバーを学歴で見ると、帝大出のインテリが多かったことが一つの特徴としてあげられます。しかも岡倉古志郎、井出洋、大谷徹太郎、小林良夫らをはじめ東京帝大出がごろごろしていました。産別会議の事務局はインテリの集団となっていて、よく言えば総合力、悪く言えば頭でっかちなんですよ。三戸信人だって大学は出ていないけれども、東京外語の夜学でロシア語を速成で学び、向こうのものを読むことができたのです。斎藤も同じです。

もう一つの特徴は、事務局ではやはり細谷松太が中心となって采配していたことだと思います。そして、彼の回りに斎藤一郎、三戸信人ら戦前派のベテランの活動家がいて重きをなしていたのです。だが、斎藤らが細谷を取り巻いて仕切っていたということでは決してないのです。斎藤にしる三戸にしる、自分の理論や信条・信念があり、まあ独立といえば独立していたのです。彼らの発言や行動に、帝大出の連中も一目を置かざるを得ない、というのが実態だったと思いますよ。彼らは理論と経験と見識をもっていたもの。

私は先に斎藤一郎について、彼が“斎藤天皇”と呼ばれていたむねの話を紹介しました。彼は戦前派の活動家における一つのタイプです。斎藤は実際にアクの強い男なんです。けれども、情勢分析や運動指導の面ではかなり鋭い切れ味をもつ、ある意味では理論家といってもよい男でしたね。

斎藤一郎には『二・一スト前後 戦後労働運動史序説』(1956年)という著書があります。私は日本労働運動史における名著だと思っています。

このほか『総評 この闘わざる大組織』(1966年)、『安保闘争史』(1962年)など、彼は10冊を超す本を書きましたが、いずれも論点が明快で、理論レベルの高い著書です。斎藤は、これら実践に裏付けられた著書を残した点でも評価されるべきだろう。また斎藤を人間として見ても裏表がなく、あれこれ弁明や釈明したりする姿を私は見たことがないのです。労働運動家としての姿勢も、実に立派だったと思います。

斎藤は一時期、神山茂夫に接近したことがありました。しかし彼はすぐに離れています。斎藤は終生“一匹狼”でした。彼は渋谷駅の八千公前の改札口でバタンと倒れ、急死しました。実に彼らしい最期だったと思います。

いわゆる“事務局支配”

産別会議の組織運営は、機関としての幹事会や執行委員会というよりはむしろ事務局が主導していたといわれています。いわゆる「事務局支配」といわれる問題は実際にあったのですか。

佐藤 ええ。あったと思いますよ。最初の事務局長は佐藤泰三という人で、彼については私は知らない。二代目の事務局長は吉田資治さんです。彼は戦前からの古い活動家の一人で、直系の日本共産党員でした。彼は実力者であり、産別会議の歴史では功労者としてあげてよいだろう。吉田さんは、全日本機器労組から選出された現役の組合役員で、書記ではない。吉田さんがどうのこうのというのではないのです。問題は組織運営や機関のあり方なんです。

産別会議の歴史ではあまり顧みられていないけれども、徳球(徳田球一)が、あるいは長谷川浩が一目も二目も置いていたのが事務局次長の細谷松太なんです。産別会議の運営や、事務局の指導・運営の実力者は細谷さんですよ。

事務局には細谷松太をはじめ、戦前からの筋金入りの活動家や日本共産党の党員が大勢おりました。

いっぽう産別会議本部の幹事や執行委員の多くは、吉田資治さんや佐藤利秋さんなど、1920年代からの活動家もいましたけれども、どちらかといえば「バスに乗り遅れるな」式の感覚で組合活動に参加した者が少なくなかったのです。多くは企業内の労働組合の規約で形式的に選ばれ、上級の機関にのぼってきた新しい活動家で、彼らは産別組合の代表という意識より、企業帰属意識を強く持ち、会社の職制ではどちらかという評価されない連中が多かったのです。

いささか一面的な見方では…。

佐藤 いや、産別会議であれ総同盟であれ、当時の労働組合はそういう傾向があったのです。現在でもありますよ。しかも、産別会議の幹事や執行委員に名を連ねた彼らはたいてい野心家で、それなりに能力があったのです。だからこそ、彼らは企業ではうだつが上がらなくても、時代の風を受けた労働組合という舞台において頭角を現したのです。

問題は、彼らが戦前に労働運動の活動歴を持っていなかったことです。当時、左翼陣営では戦前における転向の有無や、左翼活動があるか無いか人物評価の決定的な基準となっていたのです。

さっきも話がありましたが、産別会議の事務局には戦前派の活動家や帝大出のインテリ書記がごろごろしておりました。本部の幹事や執行委員は、戦前派のベテランの活動家や帝大出の書記に理論面を含めてかなわなかったのです。だから「書記局政治」ないし「事務局政治」といわれるものが生まれる条件があったのです。事務局の運営は実際上、書記が行っておりました。

規約では、執行委員会において幹事が選ばれ、幹事が幹事会を構成して産別会議の運営を担うとされています。幹事会の機能は果たされていなかったわけですね。

佐藤 ……。ええ、十分に果たされていたとは言えないでしょう。また吉田資治さんや高原晋一さんらを除いて、本気になって指導性を発揮しようと試みた幹事がいたのだろうか。『労働戦線』の場合、編集発行人は松尾さんですが、ほとんど松尾さんの判断で事が決められておりました。実際は、『労働戦線』は幹事会の統率下に、部局では機関紙部に属していました。

1947年7月に私が編集部に入ったときの機関紙部長は、印刷出版(全日本印刷出版労働組合)出身の幹事で、喜田幸二という人でした。喜田は編集部にほとんど顔を出していない。私自身、彼から指示・指導を受けたこともない。

松尾 ええ。任されていたといえば格好よいのですが、まあ勝手にやっていたというのが実態です。やっていたというよりも、いま佐藤さんが言ったように『労働戦線』に対して指導性を発揮しようという認識が無かったのかもしれない。いわば勝手にやらざるを得なかったのです。

『労働戦線』が定期刊行となった1946年の11月だったと思いますが、こういうことがありました。私は執行委員会に対して、機関紙の拡充や販売促進に向けての対策を立てて欲しい、と議題を提出したのです。そうしましたら、山崎良一という血気盛んな全日本機器出身の幹事から「俺たちは忙しいんだ。そんなことやられるか、勝手にやれ」と怒鳴られてしまいました。

あの時期は、越年闘争や2・1ストの準備でおおわらわであったことは確かです。しかし産別会議の統一強化の一つの武器として、あるいは運動を展開し勝利するためにも機関紙活動に対

する指導・助言は必要であり、重要であったはずですが。正直に言って、組織活動と機関紙活動とは有機的に結びついていなかった、と言わざるを得ない。

佐藤 この点も紹介しておきます。「事務局支配」は1948年、愛宕町の産別会館に移ってからはもっとひどくなりました。活動の面でも組織の面でも産別会議の末期症状があらわになる時期ですが、一時は書記の人事を幹事会の協議や決定を抜いて事務局が自ら決めていたのです。人事の具体的プランを、有力書記が采配をふるって事務局が立てるという事態にまでなったのです。一種のクーデタです。

あるとき、(日本共産党の)書記長の徳球がたまたま事務局に顔を見せると、ぶっ飛んで行って「オヤジさん、オヤジさん」と慕い寄り、名前をあえて言いませんけれども、憲兵あがりの書記も出てきて、えらく幅を利かせるようになりました。彼はヒラの書記に対して、幹部然として「君はどこの担当だ、何をやれ」などと指示したのです。

歯止めが利かない、そんな印象を受けますね。

佐藤 いや、そこは違います。この事務局のクーデタは未然に防止され、「クーデタ未遂事件」で終わりました。それは、人事プランの発表直前に幹事会がかろうじてこれを覆すことができたからです。高原晋一という全通出身の幹事がありまして、彼は日本共産党員でしたけれども、事務局の立てたプランを葬ってしまったのです。高原さんは戦後派幹事の一人でしたけれども、筋金入りの日本共産党員で、このときはよく頑張ったと思います。

細谷松太や三戸信人や、のちに産別民同を結成した、戦前派の書記ではなく、「日本共産党員」をひけらかした、憲兵あがりの書記らによるクーデタは失敗に終わりました。こういう傾

向は、私は最初からい wasn't でしたけれども、産別会議の結成当初からあったと思います。事務局が万事、采配をふるっておりました。幹事会は“置物”という、極端に言えばそういう認識や関係があったのではないかと私は思っております。問題のある見方でしょうか。

発行・経営事情

機関紙の発行費は事務局の予算で賄われていたのですね。

松尾 いや、独立会計でしたよ。私や佐藤さん、また小池賢二、小俣行夫君らの給料は書記でしたから事務局の人件費に含まれておりました。けれども発行費、すなわち用紙購入費、印刷費、発送販売費、編集補助員その他の費用については、産別会議の予算として立てられていなかったのです。1946年の時点で編集部が雇っていた補助員が6、7人ぐらいいて、その人件費も相当な額です。これらの人件費も『労働戦線』の販売収入で賄われていました。

『労働戦線』の創刊後、本部の財政事情が逼迫して、予定していた回轉資金が編集部に戻ってこなかったのです。当初の計画では、『労働戦線』は機関紙ですからその方面は本部が面倒を見ることになっていました。私らは本部から自前でやってくれと言われ、さあ毎号の発行経費をどう確保するか策に苦勞しました。まず私らが考え出したのは、三一書房、ナウカ書店、人民社など『労働戦線』に図書や雑誌の広告を掲載してくれる出版社と交渉して、その図書や雑誌の委託販売を始めたのです。「『労戦』書籍普及部取次」というような名称で行いました。マージンは2割です。図書や雑誌を一社当たり毎月50部、100部、あるいは300部とか販売し、これをコツコツ蓄えて発行経費の足しにしたのです。

けれども広告掲載料の収入にしる、2割のマ

ージンにしる、月ごとにそれなりの額になり有り難かったことは事実ですが、経営に大きく寄与したというものではない。むしろ私らにとって大いに助かったのは、書籍販売を取り次ぎしてマージンを除いた売上代金を支払うまで1か月なり1か月半なりの期間があります。先方へ渡すこの一時の預かり金が手元に相当な額としてありました。打ち明けますと、実はこの預かり金が機関紙発行の回転資金となっていたのです。

『労働戦線』は、ずうっとそういう形で発行されていたのですか。

松尾 いやまだ確認していませんが、1947年中6、7月ぐらいまでは「『労戦』書籍普及部取次」の事業を行い、預かり金を回転資金として流用していたと思います。この年の7月10日に産別会議は臨時大会を開催します。この時期は、編集部はとにかく忙しく、編集作業に支障を来す事態となっていました。私が言ったのか、小池賢二君が言ったのか忘れてけれども、「本業に専念しよう。これじゃ良い新聞は出せない」ということで取り止めにしたのです。

しかし、この書籍販売は編集部にとっても収益源となっていて、産別会議の事務局が管掌する部門の一つとして新しく事業部を設置し、この事業部に私らが開拓した事業を引き渡して撤収したのです。また、『労働戦線』はその頃は経営面でも何とか運営できるようになっていました。

編集部では、こまごまとした書籍販売を行ってマージンを稼ぐ、何かみみっちい仕事ではなく、ほかにも収益源を広げようということで、知恵を出し合っている事業計画を立てました。このうち成功したのは、『日記』と『手帳』の販売です。また、女優の岸旗江さんがモデルのポスターや、日映演（日本映画演劇労働組合）の東宝の女優のカレンダーを製作して販売した

ことです。これは、私らが直接販売するのではなく、事業部が行っていましたから、最初の企画や、販売にもっていくまでは大変でしたけれども大きな収益源となりました。

ドル箱だったのですね。

松尾 ええ、かなり売れました。だから編集補助員に対する給与の支払いで遅配や欠配となったことはありませんでした。これ以降は、経営資金が枯渇して『労働戦線』の定期発行が狂ったり、洋紙店に借金を残したり、あるいは「あかつき印刷」に対する支払いが滞ったりしたことはなかったはずですよ。

これらの収益金は、私が辞める1948年8月の時点で100万円ぐらい通帳に残っていました。現在では1000万、いや2000万円を超す事業資金が蓄えられていたのです。だから情勢は厳しくなっていたけれども、『労働戦線』の経営はズいぶん楽になっていました。

週5日刊の企画

松尾 1947年の秋以降、『労働戦線』の販売が伸び、経営も安定し、手元資金も潤沢になってきたことを背景に、私は『労働戦線』の拡大路線を決意しました。私の願いは増頁を図り、紙面も一本筋を通しながらできるだけ大衆性をもち、日本を代表するナショナルセンターの機関紙にしたかったのです。このことは、スタッフの面でも実現可能でありましたし、労働陣営全体からも期待されていました。『労働戦線』は、総同盟の『労働』より紙面も多様で、こう言うのもなんだけれども人気がありました。機関紙がいつそう組合員に根を下ろすためにも必要でした。

これは私の悪いクセなんです。『労働戦線』の週5日刊は、産別会議の運動の武器として必要であり、これは積極的に正しい判断であると思った私は、1947年11月より『労働戦線』の発

行を週刊から5日刊に変更することを決め、このことを幹事会の了解なしに発表してしまったのです。私のこの決定は、当然ながら独断専行として幹事会で問題にされました。

松尾さんがいま言われた事柄は、第56号(1947年10月21日)の「5日刊、実現」という記事で紹介されています。

松尾 私は創刊以来、『労働戦線』の編集発行印刷人として、経営のいっさいを任されておりました。本部から経営資金の援助をしてもらっているわけではないし、実際に発行部数も8万部近くまで伸びていて、評判も良かったのです。用紙割り当て量の増加についても見通しが立っていました。私の判断では『労働戦線』の週5日刊は、経営その他の面で客観的に可能だったのです。

『労働戦線』を週5日刊にすること自体、問題であったのではないのです。問題はこの方針を編集部だけでの判断で決定し、事務局全体の合意、なかんずく幹事会との事前の協議を行っていなかったことなんです。要するに機関の手続きを踏まえず、私が独断専行の形で決定したことに問題の根本がありました。幹事会がこれを問題とし怒ったのも当然です。

松尾さんの退職は、幹事会から独断専行として問題にされたことがきっかけになっているのですか。

松尾 やはり微妙に関連していると思いますね。1947年7月の第2回臨時大会で、産別会議の議長が新聞単一の聴濤克巳さんから機器(全日本機器労働組合)の菅道(かん・まこと)さんに代わりました。事務局長も、電産(日本電気産業労働組合)の佐藤泰三さんから機器の吉田資治に変わりました。

いわゆる“機器コンビ”ですね。

松尾 ええ。議長も事務局長も機器から出ましたので、産別会議の運動は機器や全通が中心

となって担われていくことになります。新聞単一は、1946年の産別10月ストで崩れ、組織分裂を来し、読売争議でも敗北して当初の勢いを失っていました。代わって機器が前面に出たわけです。

私は、臨時大会が終わった直後、吉田資治さんに呼ばれ、『労働戦線』の収支は事務局長の承認を受けること、経営は事務局がこれを行うと一方的に言い渡されたのです。これにはむっときました。私は、『労働戦線』の創刊を準備し、苦勞を重ねて経営における独立採算制を確立しました。そういう自負もありましたから、私は「いったい事務局がどうやって経営するというのか、『労働戦線』をどういう方向で発展させるのか」と吉田さんと口論になったのです。私らが口論になったとき、側にいた佐藤さんが「まあまあ」と間に入って、仲介したことを覚えています。

佐藤 そうでしたかね。

松尾 ええ。私が週5日刊の問題の非を指摘される前に、いま述べたような問題があったのです。けれども『労働戦線』の拡大・拡充路線は、私の持論であり、編集部全体の方針でもありました。また、これらの方針や展望は、産別会議の組織強化や運動の発展を願うものとしてはごく当然のことであり、路線じゃないでしょうか。私は、幹事会や執行委員会も当然了解するものと判断し、躊躇することなく1947年の11月からの「週5日刊の断行」を公表し、実行したのです。

“松尾構想”

松尾 『労働戦線』の拡充・発展の構想として、実は私はもう一つ、もっと深いところでのアイデアをもっておりました。吉田資治さんとの衝突は、たんに正規に手続きを踏まえなかったとか、組織人として機関を無視したとか、

といった単純なものではなかったのです。

では、どんな……。

松尾 私自身は、吉田資治さんとの衝突の真の原因が、私の見解が、実は産別会議の本部の存在を軽視し、あるいは主体性を失わせるものではないかと、誤解されたところにあったのではないかと思っています。

この間、ヒアリングの準備をしまして、かつて私が編集発行の名義人であったときの『労働戦線』に関するファイルを発見しました。私は「あっ」と驚いたのです。私が直接にガリを切って単産の委員長らに訴えた資料を発見したのです。それは、『労働戦線』の編集部の主催で、各単産の代表に来てもらって開いた編集委員会のときの記録でした。この集会は集まり

が悪く、結局失敗したようです。私はこのときの会合で、「『労働戦線』を単産の共同編集の方向で発展させたい」という趣旨で改革案を提案していました。

要するに、私は『労働戦線』を産別会議の組織強化の一環としてもっと各単産の意向を反映したものにしたい、という構想を抱いていたようなんです。『労働戦線』を名実ともに全単産の組合員のものにしようというのが、当時の私の関心事であったようです。発行部数が8万部で推移し、これをなかなか突破できないなかで、私ら編集部では『労働戦線』における新しい機軸をどう出していくのか、悩んでいたのです。

(つづく)

【注記】

松尾洋氏は病氣治療中のところ、2000年7月12日、埼玉県大宮市内の病院で心不全のため死去された。享年88歳だった。佐藤茂久次氏も2001年7月3日、沈下性肺炎により千葉県流山市の自宅で死去された。享年92歳だった。松尾氏は1978年4月に当研究所の嘱託研究員になられ、翌年4月より始まった産別会議に関する調査・研究プロジェクトに参加されて、われわれを指導してくださった。当研究所が、先に1996年3月に『証言 産別会議の誕生』(総合労働研究所)を、2000年3月に『証言 産別会議の運動』(御茶の水書房)を刊行するさいも協力と激励を惜しまなかった。ここに記すとともに、お二人に対して衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

なお、本号掲載の証言は、吉田健二がテープを起こし、生前に松尾氏がみずから試みた第一次の補正原稿をもとに、吉田の責任においてまとめたものである。佐藤茂久次氏の証言も、氏が加筆補正中のところ病床に臥されたため、本人の了解と夫人の協力を得てまとめた。

(吉田健二)